

# テクノイド — 椅子 —

長野 隆

僕は優美な椅子を見たことがない。玉座と呼ばれる椅子でさえ、常に悲哀をともなっている。美しい椅子と言えば、そぞろ可憐な響きしか与えるようには思われない。コーンという美学者が可憐を弱小と美の結合と見ているが、なる程、椅子は宿命的に弱者の立場をまもっている。彼は謂わば忍従を強いられた存在だ。彼に「足」があることも——その不徹底なつくり故に自ら移動することを去勢された「足」をもつことも——彼の突然の不幸と孤独を苛烈に演出する。△家▽の不幸などは、椅子のそれに比べればまだ救いがある。家は——たとえ主人を失った家であれ——、少なくとも固有の空間を想い出の中にいだし、大地に根をはって眠ることができ。家は、人に「場」を提供するみかえりに「場」の所有権を得ている。

家が、見棄てられ、時間の堆積を世界観に転化させたその日から、椅子は家の没落を見

とどける誓いをたてる。

冬、廃屋に突然の来客があつた。家は、再び主人を迎えた。孤立し、背を向けた椅子は、この時間のいたずらと哀しげな饗宴をどれ程までに堪え得るか。

椅子は人につき、同時に家につく。彼は二重に隷属しているがら、所有するものを何も持たない。たおれた椅子。彼はもう何年も足を投出したままだ。くずれた椅子。彼は一体何の為にそこに在るのか。戸の外に忘れられた椅子。隷属さえ許されていない。

「待つ」意志の純粹さを裏切つて、椅子の存在の意義は問われない。足がある故に「場」を選ばず、「足」があるのに場を選べない。彼は移動が可能であつて、移動することが不可能なのだ。少なくとも「場」を限定されない椅子は、その誕生の時点から「人為」の罪を象徴的に演出している。